

多民族共生

編集・発行：MEHREC P-E (メーレック पीーイー)

Multi-Ethnic' Human Rights' Education Center for Pro-existence

特定非営利活動法人 多民族共生人権教育センター

事務局長 宋 貞智

URL : <http://www.taminzoku.com> E-mail : info@taminzoku.com

Vol. 124

2013.5.30

大阪市生野区鶴橋 2-15-27

TEL 06-6715-6600

FAX 06-6715-0153

ダブルの子どもたちの人権課題—生涯に渡る重国籍の容認を

4月より当センターの事務局員を務めています。私はこれまで大阪人権博物館で20年間、学芸員として在日コリアンなどの民族的マイノリティにかかわる調査・研究、展示公開、教育普及事業を担ってきました。特に力を入れていたのが、学校教育との連携事業です。年間50校近い学校へ出向き、出前授業をおこなってきました。そのなかで、非常に印象深い出来事がありました。

在日コリアンが多住する地域の中学校でのことです。授業前、教壇で準備をする私のもとへ、一人の男子生徒が近づいてきたのです。一見して「やんちゃ」で元気よさそうな雰囲気です。何かと一瞬身構えた私に彼は、開口一番「先生韓国人やんなあ？俺もそうやねん！」。飾り気のないストレートな言葉でした。話を進めていくうちに、彼は「俺、重国籍やねん」と、父が韓国籍、母が日本籍の日本人だということを語ってくれました。私自身、日本人の妻と結婚し2人の子どもを持つ保護者です。更に親近感がわき、「うちの子と一緒にやなあ」と伝えると嬉しそうに笑ってくれました。けれども次の瞬間、表情が曇った彼の口から出てきた言葉に驚かされました。「せやけど、俺、大人になったらどちらかの国籍を選ばなあかんのやろ？絶対にそんなこと、でけへんわ...」。

血統主義の国籍法を持つ日本では、父母いずれかが日本国籍を持っておれば、出生届の提出によって自動的に日本国籍を取得することができます(1984年以前は父親が日本国籍を持つことが条件)。一方で外国籍の親が、その国籍保有国で出生手続きをおこなえば、その国の国籍を取得することもできます。一人の人間が2つの国籍を併せ持つ、「重国籍」の状態になるのです。しかし日本の国籍法は、本人が22歳の誕生日を迎えるまでに、どちらかの国籍を選択することを義務付けています。十代前半の彼はそのことを知って悩んでいたのです。

話がかわりませんが、小学校4年生の娘と最近こんな会話をしました。娘「私って『ハーフ』やんなあ」。私「そうやで。けれどアッパ(お父さん)は、ハーフやなくて、ダブルって思ってるよ。アッパの韓国・朝鮮、お母さんの日本、2つのいいことを持つてるわけやろ？半分やなくて、2つやで。だからダブルやねん」。娘「けども、アッパの韓国・朝鮮と、お母さんの日本が、ギューツと私(一人)のなかに入ってるんやろ？やっぱりハーフやん！」。

用語の使い方をめぐる難解な議論はともかく、心が温かくなったのを覚えています。重国籍であること、2つ(それ以上の)ルーツを持つことは、本来は娘が感じているような「あたり前」のことであり、肯定的に受け止めることができるはず。それを阻害するものが差別です。重国籍者が国籍選択をおこなうのは、どちらかの国籍を「捨てる」ことです。たとえ象徴的な行為に過ぎないとはいえ、そのことに胸を痛める子どもがいます。保護者の立場から言えば、子どもに酷な選択をさせなければいけないことに胸が痛むのです。

それでも重国籍の状態は国民国家における国家と国民の関係として異常であり、一つの国籍を選択するべきだと考える方もおられるかもしれません。しかし、現在OECD(経済協力開発機構)加盟34か国のうち、移住労働者に対して生涯にわたる重国籍を例外なく認めていない国は日本だけです。それぞれに問題を抱えているとはいえ、多文化共生社会を前提とする法整備を整えている国ぐにのスタンダードは、重国籍の容認であるといつてよいでしょう。日本における真の多民族共生社会を実現するための、重要課題として国籍法の改正が望まれます。

多民族共生人権教育センター 事務局
文公輝

第5回 多民族共生人権啓発セミナー2012 講演

国際結婚を通して考える多民族共生の課題

～子どもの教育に焦点をあてて～

敷田佳子さん（大阪大学大学院）

「はじめに」

大阪大学大学院博士課程在学中の敷田と申します。研究動機について、日本における国際結婚の現状について、国際児やその家族がどのような問題を抱えているのかについてお話をした後、ある国際児のケースについてドキュメンタリー形式でまとめたDVDを見ていただきます。

私は大学在学中にオーストラリアに留学をしていました。オーストラリア人100人、留学生100人が住んでいるインターナショナルハウスという寮にいましたが、シンガポールやマレーシアなどアジアの学生が多くいました。彼らはみんな優秀で、英語も私よりずっと上手で、彼らに会って、まず、自分が今まで抱えていたアジア諸国に対するイメージが大きく変わりました。また、自分が色々なことを考えていても、それを言葉にして表現できないことのもどかしさや、言葉が通じないことで意地悪をされたりという、マイノリティであることの苦勞を知ることにもなり、もしかしたら自分も、外国の方に対して日本で同じような思いをさせているかもしれないということに気づきました。

大学を卒業するとマレーシアにある日本の予備校のクアラルンプール校で、子どもたちの学習指導に当たりました。そこで、お父さんは日本人、お母さんが中国人やマレー人という国際児の子どもたちに出会う機会が何度もあり、そこでもまた自分の抱えていたイメージが大きく変わりました。それまで国際結婚家庭の子どもたちは、お父さんとお母さんから両方の言葉と両方の文化を苦勞なく受け継ぎ、世界に羽ばたいていくことができる人材だと思っていたのですが、私が出会った子どもたちは非常に苦勞をしていました。日本の学校に

通っている子どもたちだったので、日本の基準で判断されます。日本の勉強ができなければ、中国語ができてもマレー語が上手でも全く評価されませんし、逆に教える側のスタッフからは、国際結婚は難しいとか、子どものしつけができていないとかいう意見が聞かれて、どうしたらこうした子どもたちを伸ばしてあげられるのかわからないまま、もやもやしたものを抱えて日本に帰ってきました。そして、国際結婚家庭の子どもに立つような研究がしたいと、大学院に入って研究を始めたのが動機です。

「国際結婚～日本とスイス」

さて、日本における国際結婚の割合ですが、1985年から2010年までの厚生労働省の統計で見ますと、一番多い2005年には17組にひとりだと言われていましたが、現在はだいたい20組に1組、4～6%ぐらいで推移しています。また、男女比に関しては、男性が日本籍で女性が外国籍というケースが、男女逆のケースよりもずっと多く、国際結婚全体の約8割を占めます。そしてその外国人妻の国籍の内訳は、1995年はフィリピンが一番多かったのですが、その後中国やタイ、またブラジルやペルーなども増えています。韓国・朝鮮籍の方に関しては在日の方が多く含まれると思いますが、内訳はわかっていません。またここでも自分の抱えていたイメージとは違い、欧米の男性と日本人女性という国際結婚が多いというイメージを持っていましたが、国際結婚の中ではそのケースは少数で、日本の中の国際結婚は、日本人の男性とアジア人の女性という組み合わせが多いということです。

次に、さまざまなタイプの国際結婚という話に入ります。大阪大学の志水宏吉先生

を中心として「往還する人々の教育戦略」というプロジェクトを5年ほどにわたってやって来て、2013年1月に同じ名前の本を出しました。その中で色々なタイプの国際結婚家庭の教育について、家庭へのインタビューや学校調査を通してまとめました。そのうち、日本在住の国際結婚家庭で、男性が日本人で女性がアジア人の家庭の子どもたちはほとんどが日本の公立学校へ通っていますが、男性が欧米人で女性が日本人の家庭の場合インターナショナルスクールに通わせるケースが非常に多いです。インターナショナルスクールの授業料を考えますと、だいたい年収1500万円以上ないと、年に何度かお父さんやお母さんの母国に帰って過ごしたりするという理想のライフスタイルを送ることはできないという語りもあり、収入が十分でない家庭の親御さんは、インターナショナルスクールに子どもを通わせるのに、血のにじむような思いをしておられます。また、日本ではインターナショナルスクールやその他のエスニックスクールに通っていて、日本の高校などに進学をする場合は日本の中学を卒業したという資格が認められなかったり、手続きが複雑であったりと、リスクやハンデを負わなければならない場合もあります。

一方、ヨーロッパの国スイスでは、日本の場合とはずいぶん違う教育方針があります。スイスに住む日本人女性と欧米人男性のカップルについて奈良教育大学の渋谷真樹先生が調査をしました。子どもたちは現地の公立学校に通う傍ら、日本語の補習校という塾のようなところに通い、日本語や日本文化を学びます。学校の通知表には母語を評価する欄がついていて、日本語がどれくらいできるかを評価してもらえるシステムがあります。母語をしっかりと教えることが子どもの学力を育てることに非常に重要だと強く認識をしているので、日本人のお母さんたちは先生から日本語をしっかりと教えてくださいと言われるそうです。スイスは多民族国家としての歴史が長く日本とは歴史的な文脈が異なるということもありますが、日本語以外の母語は

必要ないという、日本での一般的な考え方が正しいのかどうかを、一度皆さんに考えていただけたらと思います。

「なぜアジア人女性が多いのか」

さて、なぜ日本での国際結婚にはアジア人女性が多いのかといいますと、ひとつは「ハイパガミー現象」の影響があると思われる。「ハイパガミー」というのは「上昇婚」と呼ばれるもので、社会学では、女性は現在の生活よりも高い水準の生活を望むため自分の父親と同じかそれ以上の階層の男性を選ぶ傾向があると言われていています。日本とアジアの国々では、やはり経済格差がありますので、日本人と結婚する方が上昇婚になりやすいということであジアからの結婚移住女性が多くなっていると考えられていますが、日本に来る女性がみな母国で貧しかったかというところではありません。裕福で学歴もあるけれども自国では仕事がないので日本に来たり、一度海外に行って経験を積みたいという野望や好奇心が強かったりする女性が多いです。



もうひとつ、アジア人女性と日本人男性の国際結婚を促進した重要な事例の一つとして、1985年に山形県朝日村（現 鶴岡市）でフィリピン女性と日本人男性の結婚を自治体を取り持ったという「農村の花嫁」があげられます。その時は10組前後のカップルができ、当初は農村における男性の結婚難を食い止める善策だとメディアでも取り上げられましたが、その後の報道は人身売買ではないかという批判にがらっと変わり、自治体がかかわる国際結婚はなくなり、民間のあっせん業者が出てくるようになりました。これらの農村の花

嫁に求められるのは、日本人の嫁、母としての即戦力です。フィリピンから来たり、中国から来たりして、言葉もままならないのに、結婚して来日するとすぐ、農作業の手伝いから家事、育児をこなさないといけません。ご主人やお姑さんが理解のある方の場合は生き生きと日本での暮らしをされている場合もありますが、多くは日本社会に同化していくことを暗黙の了解として暮らすことを余儀なくされています。自分の母語を子どもに伝えることすら嫌がられる場合が多く、また、ほとんどが家庭の主婦ですから、ママ友ぐらいはできても、新しい人間関係を作るのは非常に困難で、狭い世界で孤独な生活をしている場合が多いです。

「外国人の母を持つ子どもたち」

子どもが大きくなって、学校に通うようになると、また新たな困難が生まれます。子どもが持ち帰るプリントが読めなかったり、先生と込み入った会話ができなかったり、日本の学校のシステムや地域の学校の評判などがわからない場合は、進路についての相談を親子でできないということが起こります。子どもたちは、学校では母親が外国人であるためにかかわれたり、その国自体のイメージで偏見を持たれたり、ということがあるので、日本人と見た目が変わらない子どもの中には母親が外国人であることを隠している子もいます。また、家庭内では、お姑さんなどが外国人の嫁の悪口を言ったり、出身国のことを悪く言ったりするのを子どもが聞くことがあります。子どもたちにも半分はお母さんの血が入っているのに、目の前でその悪口を聞くということがどれほど子どもの心を傷つけるか想像していただけだと思います。

『遙かなる空の下で』という DVD を見てください。これはお母さんが日本人と再婚したことをきっかけに日本に来ることになったフィリピン人の女の子を中心としたドキュメンタリーです。子どもだった時期を乗り越え、多文化共生教育が盛んな大阪府立長吉高校に通って高校生活を楽しんでいるのが収められています。

DVD 中のヘイゼリンのように連れ子の場合は、新しい家族との問題や、周りに友達がいない中で、日本や日本の学校へ適応することの問題があります。それを乗り越えたと、今度は母語を忘れて、母親とコミュニケーションが取り辛くなる問題も出てきます。大変大きなストレスの中でも明るく楽しくすごして、ハッピーエンドという風に DVD は終わっていますが、彼女をサポートしていた人から聞いたところでは、同志社大学に進学後、大学を中退して音信不通になっているとのこと。彼女の抱えているものがいかに大きなものかというのが想像できますが、また、長吉高校のようにサポートのしっかりした学校の中で守られていた生活が、進学や就職を機に、厳しい外の世界に直面して、あからさまな差別を受けたり、仕事の出来を厳しく指摘されたりするということは、国際結婚家庭の子どもにはよく聞かれる問題です。

「さいごに」

国際結婚をして、政治・経済的に日本より弱い国から来た女性たちは、必ずしも自分たちの国で貧しく恵まれない生活をしてきた人々ではありません。今の夫と暮らすより豊かだったり、夫よりも学歴が高かったりする場合も少なくありません。しかし、日本で彼女たちが孤立しやすい立場にあることは事実です。それは、彼女たちが「外国人」でありなおかつ「女性」であるためです。たとえ母国でキャリアがあっても、日本で仕事に就くのが難しい彼女たちは「主婦」であることが多く、日常的にも、法的にも夫に頼らざるを得ない孤立した構造の中で生活しています。外国で生活するのは大変なことです。子育てをするのもっと大変です。子どもたちも母親のしんどさの片端を背負って生きています。みなさんや、みなさんの子どもは、そういった人たちのしんどさを理解しようとしていますか？もし今日、少しでも外国人妻／母やその子どもたちに対する皆さんの理解が深まったとしたら、それが多文化共生への大切な一歩につながっていくと信じています。

第13回 2013

多民族共生人権研究集会

さまざまな国籍、民族の人びとと共に生きる社会の実現をめざして
多彩な講演、講座を通じて考えてみませんか？



2013年

7月25日(木) 午前10時30分～午後4時25分

受付開始：午前10時～

記念講演

過激な言論がゆがめる友好

～日中韓の過去・いま・未来～

講師 若宮 啓文さん 前朝日新聞主筆。現「日本国際交流センター」シニアフェロー、
「日韓フォーラム」幹事、ソウル大学客員研究員

第1分科会 2F大ホール

日本におけるダイバーシティ

～直面する課題と私たち～

1部 講演会

表現の自由と「人を傷つけること」
～京都朝鮮初級学校への攻撃を通して考える

講師：金尚均さんキムサンギョングン 龍谷大学法科大学院教授

2部 講演会

真の多様性尊重とは
～私たちの「力」をどう活かすのか

講師：栗本 敦子さん Facilitator's LABO (えふらぼ) 代表

第2分科会 6F小ホール

グローバルな社会のなかで

～求められる支援、当事者の活動～

1部 講演会

日本で暮らす難民の現在
～厳しい現実と未来への可能性～

講師：吉山 昌さん 難民支援協会事務局次長

2部 講演会

先住民族アイヌの現状
～NZのマオリ族と比較して考える

講師：島田 あけみ 生活館を求める首都圏アイヌの会代表

参加費(資料代含む)

一般

4,000円

学生・65歳以上の方
障がいのある方

2,000円

申し込み

7月18日(木)までに下記事務局までご連絡下さい。研究集会 WEB サイト(5月末頃開設予定)からも申し込みいただけます

会場

大阪市立東成区民センター
大阪市東成区大今里西3丁目2-17
(裏面に地図)

主催 第13回 2013 多民族共生人権研究集会実行委員会

実行委員会事務局

NPO 法人 多民族共生人権教育センター

〒544-0031 大阪市生野区鶴橋 2-15-27 TEL: 06-6715-6600 FAX: 06-6715-0153

E-mail: info@taminzoku.com 研究集会 URL: <http://www.taminzoku.com/category/meeting> (5月末頃開設予定)

2012 多民族共生人権啓発リーダー育成合宿研修会

京都市内フィールドワーク

「八坂神社」 祇園祭と渡来人の信仰、犬神人の役割 「清水寺」 アテルイ・モレの碑、坂者が果たした役割

川端富蔵さん（(公財) 世界人権問題研究センターボランティアガイド）

●バスの中にて

「平安京について」

今から行きます、八坂神社と清水寺は平安京が開かれるときに一番ゆかりのあった場所ですので、まずは平安京について少しお話をしたいと思います。

紀元前後から6世紀ころまで戦争の多かった朝鮮半島からいろんな人が日本にやってきました。そのうち、八坂造（やさかのみやつこ）という一族は朝鮮半島の中ほどにある牛頭山（ごずさん）という山の神様である「牛頭天王（ごずてんのう）」と一緒に日本に来て、京都の祇園社（今の八坂神社）の神様になったと言われています。この八坂というのは八つの坂という意味ではなく、たくさんの坂という意味です。また、秦氏という一族が来ましたが、その中で、秦河勝（はたのかわかつ）という人は603年に聖徳太子の援助をもらって広隆寺というお寺を建てたと言われています。秦都理（はたのとりの）は松尾神社の、秦伊呂具（はたのいろぐ）は伏見稲荷の創建にそれぞれかかわりました。東北の蝦夷と戦い、清水寺を建てたことで知られる坂上田村麻呂も朝鮮半島にルーツを持つと言われています。この人は今の奈良県高市郡高取町の辺りにいた東漢氏（やまとのあやうじ）という一族です。都を平城京から長岡京へ、そして平安京に遷したのは桓武天皇ですが、この桓武天皇のお母さんが高野新笠（たかののいかさ）という人で、この方も百済から来た一族の一人です。また、桓武天皇が即位したときに出した祝詞の中には、高野新笠が百済の武寧王の外戚であるということが公文書として残っています。

さて、平城京で天皇が入替わり、仏教の僧たちが力を持ち始めたり、政権争いが起きたりして、色々なしがらみを断ち切るために、桓武天皇がまず長岡京へ遷都しますが、今で言う建設大臣のような地位にあった藤原種継（ふじわらのたねつぐ）という人が暗殺をされます。誰が暗殺をしたのかはわかりませんが、大伴氏であるとか、桓武天皇の弟の早良親王がかかわっているとか言われ、早良親王は淡路島に流罪となりました。ところが淡路島に流される途中に無実を訴えるハンストをして死んでしまいます。その後、桓武天皇の一家に色々な災難がふりかかりましたので、これを鎮めるために早良親

王に崇道天皇という名前を送って追尊したり、神社を建てたりしましたが、ついには都を遷そうということになりました。京都は、もともと未開の地であった嵐山あたりに秦氏が早くから入って開墾し、水脈を整え、農作を成功させて財力を蓄えていましたし、牛頭天王という神様の里でもありました。風水の関係からも最良の場所ということで、この場所に平安京を造るに至りました。

「祇園祭」

早良親王や菅原道真など、色々な人が政争に巻き込まれたりして非業の死を遂げています。そうした怨霊の祟りと考えられていた疫病の流行を止め、再び起こらないようにすることが、天皇の大きな使命のひとつでした。

平安京に都を遷して100年もすると人口が20万人ほどに膨れました。京都の鴨川は普段は水が少なく穏やかですが、雨が降ると急にあふれますので、京の町中が水浸しとなり、非常に不衛生な状態になりました。重ねて、暑い季節に起こりますので、疫病が流行するという具合です。貞観5年（863）に平安京で疫病が流行したときには当時の天皇が大変苦慮して、怨霊を鎮めるための御霊会を開きました。しかしその後貞観11年（869）に2011年の東北で起きたような、大きな津波と地震があり疫病も流行したため、牛頭天王を祀ったのが祇園祭の由来とされています。その時に大きな力を貸したのが祇園社です。

●八坂神社にて

「疫神社」

南楼門から入ってすぐのところに小さな祠があります。ここには蘇民将来（そみんしょうらい）の説話が書かれています。どのような内容かと言いますと、牛頭天王がみずぼらしい老人の格好をして、非常に裕福な巨旦将来（こたんしょうらい）の家を訪ね、一夜の宿を求めますが、見た目のみずぼらしさに断られてしまいます。次に巨旦将来の兄である蘇民将来の家を訪ね、同じように一夜の宿を求めると、快く受け入れてくれました。弟とは違って貧しいながらもできる限りのもてなしをした蘇民将来に、牛頭天王は疫病から逃れることのできる茅の輪を授け、その後流行した疫病によって、弟の巨旦将来は亡くなり、蘇民将来は無事に過ごしたという話です。ですから祇園祭で

粽を買いますと、そこに「蘇民将来子孫也」と書いてあります。これが牛頭天王を祇園祭で祀る所以です。また神様は鳴り物や光物が好きで、祇園祭で鉦を立てて鐘や笛を鳴らしますとそこに神様が乗っかると考えられています。程ないところで鉦をさっとたたむと、神様は行き場を失ってそこへとどまるということですから、祇園祭では自分の町内に入るとさっさと鉦を片付けるのです。



「本殿」

12月31日には「おけら参り」が行われます。縄に火をつけてもらって、その火でお雑煮を食べると1年間無事に過ごせると言われていますが、その縄の火をこの本殿でもらいます。また、ここは舞妓さんや芸人の方が来て豆まきをするとところでもあります。

建物を見ていただくと、大変な装飾をしています。現在の本殿は江戸幕府4代将軍の徳川家綱が日光東照宮を建てた大工さんたちに頼んで寄進したものですので、日光東照宮とよく似た装飾になっています。建て方は祇園造というもので、両方がふさがっていて、正面からしか神様を拝めないようになっています。

「忠盛灯籠」

平清盛由来の「忠盛灯籠」です。なぜ清盛発祥かと言いますと、白河法皇が祇園女御のもとへ通う時には清盛の父である平忠盛がお供をしていました。ある日、行く道で小さな光が跳ね回るのを見て、白河法皇は「魔物だから討て」と命じます。しかし忠盛がその光に近づいて正体を確かめると、お坊さんがこの灯籠に火を点そうとしているだけでした。そのことを法皇に報告をすると、「胆力がある」と感心をして、自分が寵愛していた祇園女御を忠盛に譲り、そしてできた子が清盛だと言われています。

「力水」

平安京を造るときに、安倍晴明のような陰陽師がいたのか、風水的に方角を見て色々と配置をしています。平安京は東西南北をそれぞれ青龍、白虎、朱雀、玄武とい

う霊獣が守っているとされていて、この湧水は御所から見て東の方角にあるため、青龍が棲むと言われています。本殿の地下90メートルから汲み上げられているそうです。

「犬神人」

祇園祭は疫病などを予防するためのお祭りです。疫病が流行りやすい夏を迎えるまでに、町をきれいにして、神様をきちんと呼べるように準備をします。中世には祇園社に仕えた「犬神人(いぬじにん)」と呼ばれる人たちが、祇園社の境内を掃除したり、祇園祭の際に神輿を先導したりしていました。この犬神人は普段は弓弦などを作っていました。中世の祇園社は延暦寺の配下にあったので、南都北嶺で争いが起こると、比叡山から僧兵が降りてきて、祇園社に保管してある武器庫から武器を持って御所などに押しかけました。そのために犬神人は常に武器の保全管理をしていましたが、のちに平和な時代が来ると、玩具としての武器、魔よけとして武器を作るように変わっていったということです。彼らは穢れを清める人々として、動物の死骸を処理する人たちと同じように、差別の対象としても見られていたようです。

●清水寺にて

「鹿間塚」

坂上田村麻呂が懐妊した奥さんの薬として鹿を求めて山を駆け巡っていたところ、音羽の滝で修業をしていた奈良の興福寺のお坊さんと出会い、殺生の罪を説かれたことで奥さんと共に帰依して清水寺を建てると至ったのですが、その時に殺した鹿を埋めた塚だと言われています。

「梵鐘」

応仁の乱で清水寺が焼け、勧進僧が復興のためのお金を集めることを請け負いました。願阿上人という人がお金を集めて、梵鐘を作り、平和の鐘として復興の礎にしたということです。何百年もの間に金属疲労が進んだため、2008年に門前町の人たちが同じ形、同じ音色の鐘を奉納しました。

「本堂」

本堂は桓武天皇が坂上田村麻呂に与えた長岡京の紫宸殿を移築したものとされていますが、現在の本堂は寛永10年(1633)に徳川家光の寄進によって再建されました。

清水寺は千手観音を祀っています。奈良の興福寺の僧である延鎮上人がこの地で修業をしていた行叡居士と出会い、渡された霊木で千手観音を彫って奉納したのが始まりといわれています。当時、仏教と政治との関わりを絶つために、奈良のお寺を京都に持ってくることはできませんでしたが、坂上田村麻呂には、東北を平定したと

いう大きな功績があったために、延暦24年(805)に土地を賜り、弘仁元年(810)に嵯峨天皇の承認を得て、奈良の興福寺と同じ法相宗の寺院となりました。千手観音には42本の手があります。合掌している2本は本当の手で、残りの40本の手それぞれに25の観音力があるとされていて、合計で1000になります。また、薬師如来には日光菩薩と月光菩薩という脇侍がいますが、こちらは坂上田村麻呂が東北に行くということで、勝軍地蔵菩薩と敵勝毘沙門天が脇侍しています。この仏様が田村麻呂と一緒に東北へ行き、援護したとされています。

清水の舞台は139本のケヤキを組み合わせせて骨組みを作っています。樹齢はだいたい400年ほどのものだそうで、樹齢の2倍はもつと言われているので、800年は大丈夫ということですが、あと400年もすると改修をしないとイケないですので、今からそのための木材を植樹して準備をしているそうです。舞台の隅にある擬宝珠(ぎぼし)は300年前の工芸品です。今の技術でもなかなか作れないものだそうですが、それほど貴重なものも、ここでは実際に触ることができます。

「阿弋流為・母礼之碑」

アテルイとモレは蝦夷と呼ばれていた当時の東北の人々の指導者です。阿弋流為や母礼という漢字は大和の人が当てました。当時大和の国が周辺の国々を平定していくと、その国々は、貢物をもって天皇にあいさつに訪れ、それに対して天皇もそれに見合うものを授けてお互いが合意をするのですが、東北からは一向にあいさつにやってきました。ついには派兵をしますが、東北までの道のりは非常に遠いので、途中で食料が切れては、まともに戦えずに帰ってくるというようなことを何度か繰り返したあと、桓武天皇は坂上田村麻呂を征夷大將軍として再び東北へ派兵しました。朝廷が東北にこだわった理由の一つが馬です。当時の奈良や京都には牛はいたけれども馬はいませんでしたので、どうしても彼らの所有する馬が欲しかったのです。田村麻呂は兵隊を連れて、鍬や鋤を持って東北へ向かい、到着すると辺りを耕して畑を作り、自給自足を始めます。蝦夷とよばれていた人々は半獵半農の生活でしたので、それを見て農耕に関心を示し、田村麻呂が農耕技術を教えるのでどうか大和に来てくれと頼んだところ承諾したとされています。30年あまりも大和と東北の争いが続いていたので、年を取ったアテルイとモレも、いい加減争いはやめて部族の平和を考えようということで大和へ向かいましたが、野生のオオカミのような部族だと信じ込んでいた人々によって、河内の国で殺されてしまいました。朝廷を中心に歴史を見ると、蝦夷は朝廷の威光にひれ伏した人々ということになりますが、見方を変えると、アテルイやモレ

は朝廷の侵略に抵抗し非業の死を遂げた人物ということにもなります。こうした歴史の見方の変化を承けて、二人を顕彰するため1994年に「阿弋流為・母礼之碑」が田村麻呂との縁の深いこの場所に建立されました。



「坂者」

平安時代には仏の教えが衰退するという末法思想が流布していました。この末法が始まるとされたのが永承7年(1152)です。末法の時代に人々を守るということで、急に観音信仰が盛んになりました。紫式部や清少納言も牛車を連ねて参詣しました。お金のない人も、老若男女が清水寺へ参詣にやってきました。当時は清水の舞台のところで夜中もお経をあげていて、何日も泊りがけでやってきました。そうすると、途中で行き倒れる人や、病気になる人が出てきますので、そういう人たちのお世話をしたのが「坂者(さかのもの)」と言われる人たちでした。清水寺に参詣に来た人がそのまま居ついて坂者に仲間入りする場合もありました。清掃をしたり、物乞いをしたりが日常の仕事で、特権的なものに、葬送権がありました。これは祇園社の犬神人も同じで、当時はある一定の場所まで亡くなった人を運んでくると、そこから先は、犬神人や坂者と言われる人が葬送を請け負って、墓場まで連れて行きます。亡くなった人が身に着けているものなどをもらったり、手数料をもらったりして生業にしていました。これは身分の高低に関係ありませんので、大きな家でお葬式が出ると大変大きな収入になりましたが、死の穢れに携わる人々ということで、差別の対象にもなりました。

※耳塚、豊国神社に関しましては聞き取りができませんでしたので、掲載しておりません。ご了承ください。